

お月見

「月見ってさ、十五夜の後に十三夜を見るんだってね」  
先輩は少しだけ欠けた月を見上げながら呟いた。  
天文部の活動として屋上にいるけど、正直月が出て活動どころじゃない。  
「知ってる？ 昔はね、十三夜を待つために長い長い祭りをしたそうだよ」  
「いえ、知りません」  
「そう。昨日の月見の時に月をみただしよ」  
「はい」  
冬が近いのだろう。  
一段と冷たくなった風が髪をなでた。  
もう夏は終わったのだ。  
「その後にね、十三夜の月を見ないと『片見月』って言って縁起が悪いんだって」  
「そうなんですか」  
「うん、そう」  
設置したのに二人とも覗かない天体望遠鏡。  
出した意味はあるのだろうか。  
じっと見つめていただろうか、先輩が切り出した。  
「あることに意味があるんだよ」  
「どういうことですか？」  
「ん、望遠鏡だしてなかったら天文部には見えないよね」  
「あぁ、そういうことですか」  
アリバイ、大義名分。  
そんなのが詰まっていたのか。  
視線を再び空に向ける。  
明るすぎる月は夜の空でさえ青く見せる。  
そんな事を知ったのもこの先輩のおかげだ。  
「夜でも同じ空、かぁ」  
思わず先輩の言ったことを反芻した。  
少しだけ青く見せる空。  
白い雲。  
そこは昼間と同じだ。  
「どう、月が出てても面白いでしょ」  
「はい」  
先輩も見上げているのだろうか。  
コンクリートに大の字に寝転んだ二人。  
強めの風がばたばたとスカート揺らす。  
太ももに伸びてくる寒気の手が煩わしい。  
「ねー、弥耶」  
「なんです？」  
「夜空の青さに気づいた人ってどれだけいるんだろうね。  
朝焼けにかかる虹に出会った人がどれだけいるんだろうね」  
「うん」  
「目を凝らせば見えるものはいっぱいある。  
目をそらせば見れないものがいっぱいある。  
見ているも気づかないものがいっぱいある。  
そんなことを知っているのに、素通りしてしまう人がいっぱいいる。  
悲しいよね。  
夜の青さも、朝の七色もまるで涙。  
気づかなければ、見方が変わらないんだもの」  
「涙、ですか」  
「うん、涙。  
美しくて、悲しくて、儂くて、大切なもの。  
それに気づかない人は悲しい人だよ。  
人の涙に気づけないのは、ね」  
「先輩は いえ、なんでもありません」  
「きっと何かあったのだろう。  
でも聞けない。  
夜の眼球から零れた涙が美しいから。  
悲しいから。  
儂いから。  
大切だから。」  
「弥耶はどう思う？」  
「何をですか？」  
「ん、今何を思ってる？」  
「そうですね」  
視線は一ミリたりともそこから動かない。  
「暖かいコーヒーが飲みたいですね」  
「あはは。そうだね」  
先輩が起き上がった。  
それにつられて私も起き上がる。  
手早く身分証明証となっていたそれを片付ける。  
「夜は冷えてきたもんね」  
先輩は一粒、夜空に真珠を投げた。  
「ですね」  
その行く末を見つめて、私たちは屋上から出た。